

幼児・児童期におけるスポーツスタッキングの可能性

鈴木邦明（帝京平成大学） 赤堀達也（旭川大学短期大学部）

報告の目的

小学校、幼稚園、保育園などにおける健康教育において近年少しずつ取り組まれるようになり、注目されている「スポーツスタッキング」を紹介することを目的とした。

「スポーツスタッキング」の取組状況

- 知っている人はある程度いるが、取り組んだことのある人はとても少ない
- マスコミなどで取り上げられることがある
- (NHK「グッとスポーツ」など)
- 大会が開催され、入賞者は日本代表として世界大会へ参加
- レクリエーションとして取り組まれていることが多い
- 取り組みの効能などについての研究はされていない
- 高齢者での取り組みわずかがある
- 子どもでの取り組みが多い



幼稚園・保育園における活用の可能性

平成30年4月から施行されている三法令（幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領）改正では、3施設の共通の目標として「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と「3つの柱」がある。10の姿の項目に「思考力の芽生え」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「豊かな感性と表現」があるが、スポーツスタッキングではこれら3項目の発達を期待できる。また3つの柱においても、全項目で発達が期待できる。

2歳から3歳くらいになると、カップを使った遊びを行うことができるようになる。この時期は、上手くはできないが、好奇心旺盛で様々なことに興味を持つ時期であるため、保育者が何か決めたことを行うようにするのはではなく、子どもたちが自由に考えながら様々な遊びを促していくといい。そのため、たくさんのカップを用意したり、様々な色のカップを用意したり、大きさの異なるカップを用意したりしていくと良い。次第により高くより大きく作る気持ちが出てくるようになり、10の姿の3項目及び3つの柱の発達を引き出していくことができると考えられる。

また4歳から5歳くらいになると、時間が分かり始めるようになる。そのため「3-3-3」のタイムトライアルにも興味を持ち、集中して取り組めるようになる。より良いタイムを求める意欲や粘り強く取り組むようになるため、それまでの項目に加えて、新たに10の姿の時間という「数量への関心・感覚」や、3つの柱の1つである「学びに向かう力」のより良い発達が期待できる。



「スポーツスタッキング」とは？

- プラスティックカップを積み上げたり、崩したりするスポーツ
- 1985年頃アメリカで始まったスポーツ
- 現在は、世界54カ国に協会がある
- 日本では2005年頃から普及
- 現在の競技人口は約1万人



スポーツスタッキングの種類

タイムを競うもの

- 「3-3-3」カップ3個を積み重ねた山を3個作り、戻すもの
- 「3-6-3」3個・6個・3個の山を作り、戻すもの
- 「サイクル」3個・6個・3個→6個・6個→1個・10個・1個

タイムを競わないもの

- 「けん玉」2個のカップと用い、1個を手で持ち、もう1個をけん玉の玉のように上にあげ、カップで受け取る
- 「だるま落とし」3個のカップを積み上げ、真ん中を抜く
- 「暗記スタッキング」画面に出たものを暗記し、再現する
- 「めざせスカイツリー」カップを積み上げ、高さを競う
- 「カップ積み重ねリレー」1人1個カップを持ち、積み上げていく



小学校における活用の可能性

小学校学習指導要領における関連する部分としては、体育が中心となる。低学年（1・2年）の「A体づくりの運動遊び イ多様な動きをつくる運動遊び（ウ）用具を操作する運動遊び」が直接的に関わってくる部分となる。同様に中学年（3・4年生）の「A体づくり運動 イ多様な動きをつくる運動（ウ）用具を操作する運動」、高学年（5・6年生）の「A体づくり運動 イ体の動きを高める運動（イ）巧みな動きを高める運動」も同様である。

学級経営における活用の可能性では「コミュニケーション」に着目することができる。カップを用い、様々な形で人が関わることができる。子ども同士だけでなく、PTAの親子レクリエーションなどにおいても活用することができる。



今後の課題

今回、幼児期・児童期におけるスポーツスタッキングの活用について検討した結果、課題として次のことが考えられる。

- 客観的な数値を用いて良さを示すような研究がなされていない
- 子どもを中心に広がっているが高齢者などには普及していない

